

対話イン東北大学 FY2015 詳細報告書

報告者 針山日出夫



(対話会前のシニアの自己紹介@東北大学)

【概要】

今回で10回目となる東北大学での対話会が平成28年1月22日(金)、同学青葉山キャンパスで開催された。学生28名、先生方3名、シニア8名、オブザーバー1名の合計40名が参加した。今回の最大の特徴は、学生側の要望で対話時間を最大限確保することと対話テーマの設定に入念な事前調整をしたうえで計画したこと。今回も昨年同様、通常に対話会で実施している基調講演を割愛しその代わりに対話は共通テーマ(「学生に求められる能力について」)で1回、特定テーマで2回実施し学生のグループ分けと設定テーマを組み替えてより多くのシニアと多様な対話を試みた点である。シニアのペアリングと担当テーマは固定とした。これにより、学生たちの対話満足度は従来以上であり、シニアにとっても有意義な対話会となった。

1. 対話会進行プログラム概要

1. 実施日時、場所

平成28年1月22日 13:00~17:45

於東北大学青葉山キャンパス、量子エネルギー工学科

2. 出席者(順不同)

(1) シニア 針山、川合、北山、阿部、栗野、岸、工藤、矢野

- オブザーバー： 村井（日本電機工業会）
（2）東北大学 石井教授、長谷川教授、遊佐助教授
学生 M1、B4 計 28 名（学生側世話役 笹川剛）

3. 対話会内容

① 開会挨拶（石井教授）

最近原子力分野に進む人が増加しており、原子力も徐々に復活してきたと感じる。若い人たちを宜しく教育願いたい。

② 参加シニアの自己紹介（省略）

③ 対話内容

昨年同様基調講演なしで、事前質問を受けたうえで、対話に約 3 時間割り当てた。テーブルを 4 つに分け、シニアは下記テーマ及び共通テーマ（学生に求められる能力とは何か）を担当した。

テーブル 1（原子力の将来）（岸、工藤）

テーブル 2（原子力の社会的受容性について）（針山・矢野）

テーブル 3（原子炉廃止措置と廃棄物の処理、処分）（川合、北山）

テーブル 4（核融合炉を含む次世代炉について）（阿部、栗野）

参加学生も 4Gr 構成で、各 Gr は共通テーマと上記 4 テーマのうち 2 つのテーマを選択し対話を行った。

④ 対話終了後、学生各 Gr が共通テーマ及び選択 2 テーマにつき纏めの発表を行った。

⑤ 講評（SNW 東北、阿部）

質の高い対話が出来、シニア側にとっても有意義であった。

⑥ 閉会挨拶（長谷川教授）

原子力パイオニア世代の人達の意見は、学生に役立ったと思う。次回も宜しく願いたい。

2. 各テーブル（グループ①～④）の対話概要

以下に各グループ別の対話/討論の概要を列記する。

<テーブル 1 の対話概要>

報告者：岸昭正

参加者 学生：セッション 1 三浦隆嗣、豊田丈通、実重雄磨、真栄田義一、佐藤祥平、井上寛裕、今泉光太、鈴木脩平（下線 学生リーダー）
学生：セッション 2 三浦隆嗣、豊田丈通、実重雄磨、真栄田義一、佐藤祥平、井上寛裕、今泉光太、鈴木脩平
学生：セッション 3 相馬由健、春藤史帆、小森真介、西尾樹、安永昌平、

梶島 侑馬、古館 祐樹

シニア：工藤昭雄、岸昭正

対話概要：今回は基調講演をやらずに自己紹介の後各グループが3回のセッションで対話をした。シニアはテーブルに固定された形で、学生が選んだテーマに応じてテーブルを移動していた。セッション1は全テーブル共通で「学生に求められる能力は何か？」について対話した。工藤と岸が担当したテーブル1ではセッション2とセッション3は「原子力の将来について」というテーマで対話した。各テーマについて学生から事前に質問で出されており、シニアはそれらについて一応の考えをメールで伝えているので、その感想を伺うスタイルで対話をしたいと考えた。学生側ではリーダーを決めており（上記参加者の下線の人）司会を務めてくれた。

グループディスカッション（その1）学生に求められる能力は何か？

このテーマについて30分対話した。このテーマではシニアに職場や社会での経験から学生には何が求められているかということを知りたいということだろう。私ら二人のシニアは自己の経験から何が役立つとか必要だとか、全く常識的な話になってしまったが問題解決に必要な基礎的な能力が欠かせないことを話した。具体的な専門知識については仕事をしながら身につけていくものだというのを強調し、卒論や部活での問題解決も基礎訓練として大いに役立っていることを自覚して欲しいとアドバイスした。

グループディスカッション（その2）原子力の将来について

東日本大震災の影響で発生した福島原発事故の影響で日本では脱原発の声が大きくなり、原発の再稼働が難航していることは原子力技術を専攻している今の学生にとって大いに気になることであるに違いない。事前の質問でも日本や世界の今後の原子力発電の利用がどうなっていくかシニアの考えを聴きたいというのが殆どであった。

具体的には

- ・今後の原子力発電所の稼働率はどのように推移してゆくのか。
- ・日本において原子力発電は完全に復活するのか。
- ・アジアなどの諸外国ではこれからどういう風に原子力を取り入れていくのか。
- ・福島原発以降、世界の原子力事情はどう変わったのか。
- ・原子力分野は今後どのようにしていくか。
- ・これからの日本は原発廃止を進めていくのか。
- ・自然エネルギーのバックアップとしての安定電源として活躍するようになる

のか。

- ・原子力産業が無くなる可能性はあるのか。

これらの質問では各々多少ニュアンスは違っても、どれも自分たちがこれから原子力産業分野に職を求めても大丈夫だろうかと心配している様子が感じられる。自分たちより知識も豊富なシニアから生の声を聴きたいということなので、事前の回答に加えてシニアネットワークが日頃主張している原子力の必要性を改めて話し、学生の反応を伺った。またこのテーマにぴったりの解説が原子力学会誌の2016年1月号に日本エネルギー経済研究所の村上朋子氏が「世界の原子力発電利用・開発動向 エネルギー安全保障と原子力」と題して掲載されていたのでその概要を紹介した。

グループディスカッション（その3）原子力の将来について

グループのメンバーが入れ替わって同じテーマについて対話した。このグループも事前の質問が出ており、ほぼ同様の内容だった。でもこのグループの方が原子力産業への就職に積極的な学生が多いように感じた。

具体的な質問は

- ・シニアの原子力に対するビジョンを聴きたい。
- ・原子力に関する理解を深めてもらうための知識や情報の発信方法について
- ・今後原子力発電はどの程度の力を入れていくのか。新規に発電所を建設する可能性はあるのか。
- ・原子力発電所の設計において、詳細石器絵という装置の形を決めていく仕事に非常に憧れがあるが、将来再び日本独自の設計で1から形を決めていくような大きな仕事は来るのだろうか。
- ・核燃料サイクルを含めた今後の原子力発電の方針について

このグループでも将来日本の原子力はベース電源として欠かせないこと、また世界の原子力発電は特に中国やインドなどアジアで大規模に開発される見通しであることなどを話して学生を励ました。

（まとめ）

基調講演が全く無くて長い時間の対話になったが、学生は飽きる様子もなくしっかり対話に集中してくれたのは評価できた。しかし、学生の発言が少ないのでどうしてもシニアの説明時間が多くなってしまった。毎回同じような反省だが改善したいものだ。

<テーブル2の対話概要>

報告者：針山日出夫

1. テーブル2の対話テーマ：

セッション①：共通テーマ「求められる能力について」

セッション②、③：「原子力の社会的受容性について」

2. 参加者：

(シニア) 矢野歳和、針山

(学生) セッション①、②：7名(B4 2名、M1 5名・内留学生1名)

セッション③：7名(全員M1・内女学生1名)

3. 対話の流れ、概要

セッション①、②並びに③では、今後の進路希望や趣味や本日の対話会で特段対話したい関心事を各自が紹介。その後に、まず事前質問に答えたいうえで設定テーマに拘らずに各自が示した関心事を中心に自由に対話を進めた。

<対話した内容並びに特記>

全体として、極めてまともな意見交換が出来、世代を超えた対話の多様性と可能性を共有できた対話であった。

◆ セッション①関連：「今、学生に求められる能力について」

(シニアからのメッセージの要点)

- － 求められる能力とは、生き抜き成功するためのエネルギーと知恵。
- － 漠然と考えても意味ない。どんな生き方をしたいのかで決まる。
- － 自分の才能を発見し、磨き、それを活用する能力が問われる。

(学生からは、自分の特徴、得意なことなどについて自由に発言あり)

◆ セッション②③関連：「社会的受容性とエネルギー安全保障」

(事前質問への回答や自由討議から出てきた論点等を以下列記。➡はシニアからの強調した説明項目)

- － 原子力の社会的受容性を阻害している要因は何か？有効な対策は？
➡情報、知識、日本人特有の情緒的発想、放射能アレルギー、マスメディアの扇情的偏向報道、日本人の躰(リテラシー)、政治のリーダーシップ、リスクと便益についての明快な認識の欠如、原子力規制・事業者への不信、バックエンドの頓挫(再処理、廃棄物処理処分)
- － 原子力の利活用継続で国民的合意形成は可能か？
➡国論が割れた状態は続く。民度以上の政治・マスメディアは生まれないので、国民的合意は困難だが、時間をかけて粘り強い説明が肝要。
- － エネルギー危機についての認識不足とマスメディアは責任では？
➡平和と自由とエネルギーはただ同然で手に入るとの能天気な民族。マスメディアの責任は重い。

<テーブル3の対話概要>

報告者：川合将義

参加者 学生：1,2 山口裕輝、春藤史帆、小野寺駿斗、小森真介、古館祐、

五月女貴平、新村徹（下線 学生リーダー）

学生：3 今泉光太、三浦隆嗣、豊田丈通、実重雄磨、真栄田義一、
佐藤祥平、井上寛裕、鈴木脩平

シニア： 川合 将義、北山一美

対話概要：ファシリテータ役を学生リーダーに委ね、先ず自己紹介の後、対話テーマに関する質問を出し、それについて議論し、学生がまとめた。

グループディスカッション（その1）学生に求められる能力は何か？

原子力を学ぶ者として、一般人への対応能力と専門に対する能力に分けて議論した。一般人に対しては、専門について本質を理解し、相手に寄り添った分かり易い説明力、相手を理解することが重要であると結論。専門においては、コミュニケーション力を上げること、協調性とリーダーシップ、語学力を上げることが重視された。また、仕事での判断力と忍耐力についても挙げられた。

グループディスカッション（その2）放射性廃棄物の処理処分について

高レベル放射性廃棄物の処分地が決まらない要因として、1万年を超える長期保管への不安が先ず挙げられ、専門の北山が、深地層（削除：埋設）処分の安全性と日本列島の成り立ちから候補地が十分にあることを説明し、納得を得られた。核変換技術について実際に研究している学生からの質問に対し、当面は溜まった高レベル放射性廃棄物の適切な処分法による実際の処分実施の方が喫緊の課題であり、核変換技術は将来テーマとして取り上げられていると説明した。超ウラン元素の原子炉内での消滅は、潜在核分裂性核種も効果的に変換できる核分裂反応が起きる高エネルギー中性子が支配的な高速炉、加速器消滅炉とともにハイブリッド型の核融合炉が研究されていること、核分裂中性子数も高速中性子による方が多いこと、一方、熱中性子炉では、反応率の高い中性子吸収反応によって重い原子核ができることを説明。各学生が自分の研究との関連で質問し、真剣に聞き納得していたようであった。

グループディスカッション（その3）廃止措置について

事故炉への対応が遅れたことへの質問があり、事故そのものへの対応を巡ってシニアで議論。特に1号機のIC（非常時復水器）の運転技術はベテラン運転員では共有されていたが、今回の電源喪失事故後、何故ICを積極活用できなかったは不明。特に電源喪失後、①IC“A”系再起動、②地震発生後、早期に停止したIC“B”系再起動、③電源喪失後中央制御室の操作盤ランプが消えかかっていたHPCIの手動起動の重要操作のうち、どの操作も行われなかったことが大きな問題と認識していると説明。次いで福島事故炉と寿命が来た通常炉の

廃止措置の違いについて、事故炉は水素爆発で原発周辺が放射性物質で酷く汚染されており、除染が先ず大事なこと、炉心が溶融し、格納容器も損傷しており、原子炉内部の様子が分からないため、先ず、燃料デブリの位置や溶融状況の把握、及び溶融燃料の部分的切断を含めた、取り出し計画の策定の後、事故解析と照らして初めて最終処分を含めた廃止措置のやり方が明確になる、それから実際に使うためのロボットなど技術開発を行うために全体として 40 年も掛かること、一方、一般の寿命の来た炉は内部の状況が良く分かっており、計画に従って粛々と措置を進められることなど説明。次いで、通常炉の廃止措置の方法は JPDR の解体の経験があることを説明し、さらに汚染水の処理法の技術的な問題とともに漁業者への対応について議論した。

(学生の発表)

質疑内容を記したポストイットを模造紙に貼付けて整理したもので発表。発表は、対話テーマ順に班毎で、細切れ感は否定できない。

(1) 学生に求められる能力は何か？

一般人への説明力、専門家としての知識とコミュニケーション力と要約

(2) 放射性廃棄物の処理処分について

処分場建設の問題について以下のように要約した。一般の人に対しては、処分場候補地の活断層の活動による影響、地下水、火山に対する安全性を丁寧に説明することが重要である。専門的な立場では、処分場の選定と建設技術は確立しており、長期管理技術も埋設処分研究施設での研究を通じて構築されつつある、候補地の選定が喫緊の課題である。また、核変換は将来テーマである。

(3) 廃止措置について

事故炉と寿命が来た炉の廃止措置の違い、特に、4機の事故炉の損傷状態が異なるために、夫々違ったやり方で解体処理が必要であること、解体で生じた放射性廃棄物の処分技術と処分場が課題であると説明された。

(まとめ)

対話全体を通して、全ての学生が質問を準備して、シニアの回答を真剣に聞く姿が見られた。彼らの今後の研究に参考になることを期待する。ただ、対話でなく説明時間の方が長かったかなと反省傍ら、もっと学生に積極的な発言が欲しかったと思う次第。

<テーブル 4 の対話概要>

報告者：栗野量一郎、阿部勝憲

セッション① 共通テーマ：「今、学生に求められる能力とは何か？」

参加学生： M1×4名、B4×1名

最初に以前採用計画に携わったことのある栗野より、企業の採用側としての経験の話をした後、関連する意見交換を行った。質問の中には、

- 原子力分野の人間は、世間からは異質に思われているのではないか。
 - 原子力屋として是非とも持つておくべき能力というものはあるか
 - 電力技術者なのに、カラスを勉強した理由は何か
- などというものもあった。

これら質問に対し、コミュニケーション能力や、課題解決のための基礎学力さらには(特に原子力関係者は)自分のやっていることを他人に納得してもらえよう、簡単なわかりやすい言葉で説明することが必要であることなどについて意見交換した。

また事前質問に関連して 他に

- 今後需要が高まる原子力関係の業種は？
 - ・・原子力関係の産業分野はエネルギー利用と放射線利用が同じような規模で多種あるので心配しない事。
 - 日本の原子力メーカーは生き残れるが？
 - ・・日本の代表的メーカーの海外への展開もあり、ものづくりの中核である。
- 等の意見交換もした。

セッション② テーマ：「次世代炉、新型炉」

参加学生：M1×3名、B4×1名

まず事前質問 特に高速炉関係について概説した後対話に入った。主な質問は次のとおり。

- 高速炉の技術があつてこそ核融合に進むことができるが、現在「もんじゅ」がトラぶっている。新たな原子力開発のためには、ケチのついて古くなった「もんじゅ」をすてて新しい炉を作るという考えはないか。
 - 「もんじゅ」を高速炉開発の為のものというより、放射性物質を無害化する核変換炉なのだといえ、国民の理解が得やすくなるのでは。
 - 「もんじゅ」が頓挫していると、プルトニウムの兵器転換の疑惑も出てくるのではないか。
 - 規制委員会は、「もんじゅ」には技術者が足りないと言っているが、実際はどうなのだろう。
 - 一方規制委員会や原子力規制庁にはどのような分野のどのような人材が必要か。
 - 高速炉の国際協力はおこなわれているのか。
- など、このセッションは高速炉 とくに「もんじゅ」の運転再開に関する課題

が中心となった対話となった。とくに高速炉の開発で我が国は「常陽」の建設・暗転など世界的な実績があるのに、このまま「もんじゅ」が遅れると、ロシア、中国、インドに後れを取るという危機感も話し合った。

セッション③ テーマ：「次世代炉、新型炉」

参加学生：M1×5名、B4×1名

このセッションでも、まず事前質問に対する概説を行った後対話に入った。主な質問は次のとおり。

○どのような炉が一番良いと思っているか。核分裂の各種炉の比較そして軽水炉～高速炉～融合炉という一連の流れのそれぞれの視点で。

○原子力に対し負のイメージが非常に強くなっている中で、核融合炉も核分裂炉も、一般の人たちにはどちらも同じ原子力だとみられ、核融合を進めるのも困難なことと思われる。社会に理解してもらうためにはどうすればよいか。

○核融合は安全なものと考えているが、危険要素としてはどんなものがあるか。

このセッションは、主に核融合（現在の原子力も同じ）を世の中の人々に理解してもらうために自分たちはどうしたらよいかということが対話の中心となった。そしてそれらを「技術面」、「社会受容面」、「制度面（政治を含め）」、「世界（に負けない日本を作るために）」という4つの面で取りまとめた。

また事前質問の電源喪失対策については、直流と交流の両方の対策が必要なことを現場体験から紹介し、理解を深めた。 以上

4. 参加シニアの感想

以下に参加シニアの感想、所感を列記する。（順不同）

<工藤昭雄>

1. 基調講演なし、対話時間3時間とするやり自体は成功であったと思う。
2. シニアの説明にすぐは納得せず、再度食い下がる例も一部あったが、総体的には、受け身の姿勢が強く感じられた。
3. 学生は原子力に最も近い学科で学び、研究しているので、シニア側も素人とは思っていない。自分でもよく調べ、シニア側と対等に意見を述べ合うことを期待していたが、若干期待はずれであった。
4. M1が大部分で、就職が気になるのはやむをえないが、“学生に求められる能力はなにか？”がテーマになるようでは、少々問題だなあと感じた。
5. ただGR1で相手を務めた学生参加者に原子力関係に就職を希望する

ものが複数いたことに、若干勇気付けられた。

<栗野量一郎>

- ・対話前は対話時間が1時間15分もあり、そんなに対話が続けられるか と言っていた学生もいたが、対話に入ってみると、質問が質問をよび、時間が足りなかったという声に変わったようである。充実した対話になったものと思われる。
- ・事前質問に対して我々シニアからの回答は見たかと聞くと、「ハイ」との返答であったが、大部がどうも事前回答には目をとおしていない感じであった。このためセッション②、③では対話時間の約半分をかけて事前質問に対して簡単な解説を行った。この原因としてはシニアからばらばらと多数の回答があり、自分のグループのものがどれか判断に迷ったのではないかとも思われる。
- ・今年はグループ発表が復活したが、やはり発表があると学生たちもそのためにまとめなければならず、質問内容も集中してくるようである。やはりグループごとの発表は必要と感じた。但し、時間スケジュールに「まとめ」の時間も明示しておくとうまいと思う。

<岸昭正>

今回は10回目になる東北大学での対話に参加し、多少歴史を感じる。私も母校での対話で地元仙台に住んでいることもあって最初の頃から何回か参加させて頂いた。基調講演を止めて対話に専念するようになったのは昨年度からだ。この試みをより実効あらしめるにはやはり学生の発言をより活発にするしかない。今後の課題だが、学生の意見をより多く聞けるようなテーマの選定も考えるべきかと思う。今回は学生が就職を念頭に關心の深いテーマだったと思うが、シニアのビジョンを聴きたいといった内容のためシニアが喋りすぎた感がある。

<矢野歳和>

担当した課題は3件である。SNW 針山様に同席した。①「学生に求められる能力は何か？」は単純に「読み書きソロバン」つまり理解力、発信力と数的な理解力が基本である。その上に専門の素養、芯の強さや臨機応変性が欲しいが、就職対応を気にするより原子力界を牽引する意気込みが必要と鼓舞した。②「原子力や放射線の一般の理解」は、対話に先がけて「原子力の社会的受容性」を作成し事前に配布した。老年世代は反原子力が多く、若い世代は原子力推進に理解があることを確認した。③「原子力のリスクとエネルギー安全保障」はSNWと意識の差はない。まとめを以下に示す。学生は大学の教育以外に実社会の経験者との交流に興味がある。原子力専攻の学生はエネルギーセキュリティと地球温暖化対策を推進する立場にあり、自信を持って世の中を牽引するように軽く背中を押すことが、彼らを次世代のリーダー集団へと育むことになる。

<川合将義>

対話内容：「廃棄物処分は如何にあるべきか？」 並びに「廃炉措置について」

今回の相手は原子力専攻ということで、事前質問に対して従来のように全部答えず、概略を説明する一方、詳細はインターネットなどで調べるように URL を与え、それで調べた結果に基づいて再質問するようにした。結果は、対話会前の再質問ゼロであった。いつ学生に渡ったのか知らないが、参加が急に決まった北山氏の資料が渡っていなかったことから、直前だったのかも知れない。やはり、対話会のテーマと事前質問は、2週間以上前に欲しい。学生に対しても、シニア回答が来次第学生に渡してもらいたい。

対話会では、全員が質問を用意していた。自分の研究テーマに関係するものは当然として、皆、一様にシニアの説明を真剣に聞く姿勢は好ましく感じた。但し、事前に受け取った質問と変わらないものもあって唾然とした。これは、回答を読んでいないか、読んでいても当方が示した URL で調べていないせいかも知れない。（それができない程に多忙だったのかも知れないと思い、対話を進めた。）折角の対話会である。シニアもより深い議論をしたいし、学生は、シニアをやっつけるぐらいの気概で向かって欲しい。過去の対話会で、早大の文科系の学部学生が参加し、原発批判の意見をぶった。新聞ニュースなど良く調べており、その日の対話は、いつも以上に盛り上がった。

原子炉の廃止措置は、その方法も確立しておらず、工学的な課題が多い。この専攻科は機械系であり、ロボット技術や材料問題は守備範囲の筈。現状を聞くだけでなく、自分の考えを披露するぐらいの積極性が欲しかった。もっとも、疑問を糾すことの方に気を取られたのかも知れない。（対話は細切れでなく、融通性があつた方がよい。）

今後、原子力は国内よりも開発途上国で必要とされている。学生諸君は、世界を目指す技術者に成長してもらいたいものである。今回の対話が、その動機づけになれば幸いである。

<北山一美>

2016. 1. 22 東北大学での学生の皆さんとの「対話イン東北大学」に参加しました。私の参加は約1週間前、予定の講師が出席できないため、代理出席を依頼されたものでした。そのため全体の進行把握や資料作成等の方針把握に若干時間を取られ、学生さん方との対話の進め方を十分考える時間がなかったことを反省しています。また学生の皆さんの事前の関心事項に関し、私の個人的な回答は作成し、事務局あてに送付したものの、当日皆さんに配布はされていませんでした。今回の最終報告書とりまとめにあたって、私の「事前に作成した資料」及び「参加した感想」を送付します。可能であれば事前の資料は私のセッション（グループ3）に参加した学生さんに配布していただければ幸いです。

また私の担当のグループ3の対話概要は既に川合先生から報告されていると思います。私の担当グループの議論を通じて、感じたことは、意外に「高レベル放射性廃棄物の処理処分」は皆さんに知られていないことでした。また議論の当初は（大学の立場からすれば当然かもしれませんが）処分そのものより、将来より一層研究が進むであろう、核分裂で生成するMAの減容や有用元素の利用といった点に一層の関心が見られました。それに反して、国内での高レベル放射性廃棄物の処分の可能性について、十分な理解が得られていないと感じました。しかし学生の皆さんと対話が進んでいくうち、地層処分の重要性や国内での成立性、安全性といった内容も理解していただいたと感じました。

今回学生さんたちが、説明や議論のエッセンスをうまくまとめ、その概要を他の皆さんに紹介するやり方をとっていましたが、大変良い進め方であると思いました。今後とも学生のみなさんが主体的に議論を進める対話活動が長く継続することを期待しています。

<針山日出夫>

今回で4回連続参加の機会を得た。学生側幹事の笹川剛さんの事前の入念な企画・調整・事前質問回答取り纏めなどのお骨折りのお蔭で、円滑で意義深い対話会が出来たことに感謝申し上げる。今回は昨年同様、学生とシニアの対話時間確保を最優先としたプログラムを組むことで基調講演は取りやめとし、その時間を使って、共通テーマ1つ+特定設定テーマ2つの合計3つのテーマでの対話を実施した。このやり方は賛否があるが、世代を超えての対話が機能するかどうかの観点からは結構有効で一考の価値がある。

対話は、「求められる能力」「エネルギー安全保障の考察～その1、その2」で意見交換したが期待以上ではなかった。日本の最高学府の学生の世界を俯瞰した鋭い感覚と切り口をベースにした議論を期待していたが比較的印象に薄い内容に終始したとの印象。ただ、学生達の将来への希望と夢に照らしてみると、結構前向きで意気消沈した様子は全くない。M1という状況で、進路をしっかりと決めきれない学生も多くいるが、自分の能力を磨いて世の中で活躍し貢献したいとの意欲が十分伝わる話しぶりであった。彼らの将来が輝かしいものであることを祈りたい。

<村井正人：オブザーバー>

- ・進行等良くまとまった対話会であったと思う。対話会幹事/学生幹事の事前調整が細くこなされていた成果と思う。
- ・3つのセッション構成であったが、2セッション構成としてひとつのセッション当たりの対話に十分な時間を取っても良かったのではと感じた。
- ・一部シニア同士の持論展開に熱が入り過ぎ、その間学生がポカンとする場面もあり、学生との対話が主であることにもう少し配慮してほしい。（セッション③テーブル3）
- ・学生にとっては、先生方の先生にあたる年代のシニアの方との対話は、良い刺

激になった様子であり、対話会の目的は十分果たしたと思う。

- ・私自身も、学生達の勉強している姿勢、シニアの皆様の熱意に大いに刺激を受けた。

以上